

# カトリック八尾教会ニュース

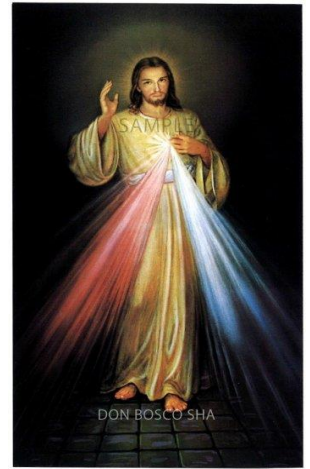


2024年6月  
Tháng sáu

こんげつ よてい  
【今月の予定】

じかん  
ミサの時間

2日(日・祭)キリストの聖体	7:00、10:00	
7日(金・祭)イエスのみ心	-----	
9日(日)年間第10主日	7:00、10:00	
16日(日)年間第11主日	7:00、10:00	
ベトナム語のミサ (*時間変更)	13:00	びょうしゃ いの つど 病者の祈りの集い
22日(土)子ども会(初聖体勉強会)	14:00	
信仰講座	16:00	
23日(日)年間第12主日	7:00、10:00	こ 子どもとともに
↳聖ペテロ使徒座への献金		ささげるミサ
24日(月・祭)洗礼者聖ヨハネの誕生	-----	
29日(土・祭)聖ペトロ 聖パウロ使徒	-----	さかいとしひろ ほ さしきょうれいめい パウロ酒井俊弘補佐司教霊名
30日(日)年間第13主日	7:00、10:00	



【平日のミサ】 木曜日 10:00 13日、20日、27日(6日はお休み)

## ■財務委員会よりお知らせとお願い

令和6年度の月定献金袋をレターケースに配布しています。納入カード説明も配布してまいので、ご確認ください。不備やご質問また、配布のない方は会計にご連絡ください。

## ■信徒総会がありました (5/12)

- ・2023年度の収支報告及び2024年度予算報告があり、承認された。(信徒総会資料配布)
- ・2024年度八尾教会年間予定表配布。
- ・その他、ミサの祈りや聖歌について意見が出された。次回評議会で検討。

## ■6月はイエスのみ心の月

イエスのみ心は全人類に対する神の愛の象徴としてイエスの心臓を表し、その信心はイエスのみ心に表される神の愛を思い起こし、その無限の愛のしるしであるみ心をたたえるものとして中世に始まりました。

特に聖マルガリタ・マリア・アラコック(1647-90)がみ心の信心についての啓示を受けて17世紀にフランスで広まりました。1675年6月16日、この聖女はご聖体を前にして、イエスの愛にこたえたいという思いに駆られました。そのときイエスは、愛情に燃えているみ心を示して、人々の間に存在する冷淡な心を嘆かれ、イエス自身の愛に倣ってその心を尊ぶことを勧められました。

またこのようなイエスの出現が数回にも及び、ご聖体の祝日(キリストの聖体)後の金曜日をみ心を礼拝する特別な祝日として定めるようにとのお告げにより、み心の信心の内容と形式が明確にされるようになりました。

そして1856年に教皇ピオ9世によってイエスのみ心の祭日をご聖体の祝日後の金曜日に全世界で祝うことが定められました。ご聖体とみ心の主日がおおよそ6月に祝われるというこのような歴史からして、次第に6月が「イエスのみ心の月」と自然に浸透し、制定されてきたことは十分に考えられます。

(カトリック中央協議会 H.P より)

事実、典礼は信者が、キリストの秘儀と真の教会の本来の性格と生活をもってあらし、他の人々にも示すために大いに役立つものである。典礼によって、特に神聖な聖体の生贄において「われわれのあがないのわざが行われる」からである。人間的であると同時に神的であり、見えるものでありながら、見えない要素に富み、活動に熱心であるとともに観想に励み、世の中にあるながら旅するものであることが、この教会に特有のものである。しかも、そこでは人間的なものが神的なものに、見えるものが見えないものに、活動が観想に、そして現在がわれわれの求める未来の国に向けられ、従属している。したがって、典礼は(教会の)中にいる者を、日々、主における聖殿、霊における神の住居として建て、キリストにみち満ちた成長にまで達せしめようとする。同時に典礼はキリストをのべ伝えるために、教会の中にいる者の力を驚くべき方法で強め、こうして外にいる者に対しては、教会を諸民族の前に掲げられたしるしとして示す。そのしるしのもとに散在する神の子らが一つに集められ、一つの群、ひとりの牧者となる。

『典礼憲章』第1章2)

私たち人間に備えられている能力のうち、最も高度のものを挙げる場合、抽象化能力が一番になるのではと知っている。何故なら、目に見えてくる色々な現象から、その現象に捕らわれず、本質をズバリと把握し、それを思考の材料として用い、新しいビジョンにまで持ち込める能力であるからだ。教会は秘儀である。これは、教会を建物として、つまり、物理的なものとしてではなく、神様の救いのみわざを表す道具としての表現で、目に見えるものだけに捕らわれていては決して、その奥の意味まで到達できない。

その教会の中で典礼が、とりわけ、キリストの生贄を記念するミサが行われる。聖書の言葉と福音を読み聴き、感謝の歌を歌い、捧げものを捧げ、キリストによる救いを記念する。それを通して、信じる者は皆一つになる。聖人達があそこまで、自分を投げ捨てた、素晴らしい生き方が出来るようにしたのも、日々行われるミサの中で力を得たことにある。朗読が行われる時、人間の声で読まれる中から神様の声を読み取る。パンとぶどう酒が捧げられる時、司祭を通してキリストを見る。これら出来るようにする聖霊を感じる。

また、御父の恵みを改めて感じていく。ミサが終わり、信者は派遣されていき、世の中で光と塩の役割を担う。その素晴らしい生き方に人々は魅了され、教会に集まってくる。よって、キリストに結ばれた私たちは、世の中で生きていながら、既に天の国を生活している者になる。日々の煩さ、それに捕らわれず、迷わず、命の道を歩む。複雑に見える世の動き、それに混乱されず、命の道を歩み続く。

揺れ動くようなもの、その中に深く潜んでいる渴きを読み取り、手を差し伸べる。憐み深い御父に憧れ、キリストに倣い、聖霊に励まされ、今を、今日を生きる！



